

女子短期大学生の家族画テスト（2）

栗山和広

Family Drawing Test in Women's College Student（2）

Kazuhiro KURIYAMA

はじめに

現代社会では、さまざまな心理的・精神的問題を抱えている人が増加している。そうした人に対する治療として、今日多くの心理療法が開発され、その成果が見られるようになってきている。そうした心理療法の中でも、個人の異常な行動は家族全体の人間関係の病理としてとらえようとする家族療法が1990年代になって、日本でも注目を集めるようになってきた。家族療法の基本的な考えでは、病んでいるのは個人そのものではなく家族全体のシステムにある。そして、治療は単位としての家族が治療対象とされるべきであると考えている。

ところで、こうした家族療法を実施する際に、家族関係の病理をどのようにアセスメントするかという問題は極めて基礎的かつ重要な問題である。家族関係を診断するためには、従来はTATやロールシャッハテストが用いられてきた。しかし、最近になって、「あなたの家族画を描きなさい」という指示でなされる家族画テストが注目されてきている。家族画テストは、従来の心理テストと異なり、非言語的コミュニケーションであるグラフィックコミュニケーションの形で情報を得ることができる。これは、被験者が家族内における自分の孤立やまた家族内のある者に対する敵意を言語的に表現するよりは、グラフィックコミュニケーションで表現する方がより表現しやすいということから考えると、家族関係の問題を知るのに他の心理検査よりも有効な方法であると思われる。こうした点から、学生相談や心理療法において家族画テストは用いられるようになってきている（高橋 1987）。

従来の家族画テストでは、石川（1982）が歴史や実施方法について、また、高橋（1984）はその理論的な根拠について、入江（1994）は不登校の児童や非行少年の家族画における表現病理について、高橋（1985）は大学生の家族画の分類について、検討し考察している。しかし、まだ家族画の分類化や信頼性や妥当性については十分に基準ができていないと言いがたく、年齢、性格、所属集団、行動様式などの異なる集団を用いて、家族画の分類化や内容の基準を明らかにしていくことが必要と考えられる。

そこで、栗山（1985）は、家族画の分類化、問題表現や様式内容の基準化の資料を得るために、

まだ検討されてこなかった女子短期大学生に家族画テストを実施した。その結果、家族画の描画様式の類型化として、家族の動きが静止している静止的家族画と、家族が動作をしている動的家族画の2つにまず大きく分類された。さらに、静止的家族画には8つの類型化が、動的家族画には3つの類型化がなされた。このようにして、栗山（1985）は一応の家族画の様式や内容の基準についての資料を得た。しかし、こうして得られた類型化の資料が、一定して見られる安定した様式であるかについてはまだ十分に明らかにされたとは言いがたい。そこで、本研究の目的は、女子短期大学生に再び家族画を実施することにより、栗山（1995）の研究で得られた資料が、一定して見られる安定したものであるかどうかを検討することにある。その際に、本研究では、文章完成法テスト（SCT）の家族関係の一部を記述してもらい、それを5段階で評定することにより、家族画の内容分析についての客観的資料を得ることとした。

方 法

被験者 女子短期大学生1年生141名。

手続き 講義終了後に講義室で行った。家族画テストには、個人法と集団法があるが、本研究では集団法を用いた。女子短期大学生に画用紙を与え、次のような教示を行った。「これから絵を描いてもらいます。これは絵の上手下手には関係がありませんから気楽な気持ちで描いて下さい。皆さんがもっている鉛筆を用いて絵を描いて下さい。絵のテーマは私の家族です。お互いの絵を見ないようにしてください。また、何か質問があるときは手を挙げて個人的に尋ねてください。絵を描く時間は50分ぐらいですから、その時間に描き終えて下さい。」また、絵を描く際、隣同士の絵が見えないように被験者の座る位置の間隔を離すように指示した。検査者の教示に対し被験者が、「家族全員ですか」「自分もいれるのですか」「顔だけですか」という質問をした際には、「思ったように描いて下さい」と答えた。家族画を描き終えた後に次のような教示を行った「画用紙の裏に簡単な略図を描いて、その人が誰であるか、また描いた順序に番号を記入して下さい」。さらに、その後文章完成法テストの家族に関係のある部分が記入されてある用紙を与えて、それへの記入を求めた。本研究で用いられたSCTの刺激語は「家の人は私を、私の父は、私が嫌いなのは、将来、私の兄弟は、私を不安にするのは、友達、私の母、家の人は」の9つであった。これは、集団法では個人法のようにテスト終了後に個人ごとに質問ができなかったために行った。

結 果 と 考 察

本研究では、栗山（1995）において見いだされた描画様式の類型化を参考にして家族画を分類した。まず、家族が静止している静止的家族画と家族が動作を行っている動的家族画の2つに分類された。また、SCTについて、2人の評定者が、家族関係を(1)かなり悪い (2)悪い (3)普通 (4)よい (5)かなりよいの5段階の評定を行った。そして、2人の平均評点をそれぞれの家族画の評点とした。尚、5段階の評定における評点の3は普通という評定であることから、評点の3を標準とみ

なした。また、SCTの内容を示す際は、主に刺激語として「家の人は」に対する反応文を本研究では示した。本研究では、家族画の出発点としての資料を得ることを目的としているので、統計的検討は行わなかった。

(1) 静止的家族画

栗山(1995)は静止的家族画には8つの類型化を見いだしたが、本研究では10の類型化が見いだされた。それぞれの各型における被験者の人数が全被験者に占める人数の割合を各類型ごとに求めた。

①記念写真型

これは、家族写真のように、家族のメンバーが静止してそろって並んでいる姿を描いたものである。記念写真型には、人物の全身を描く場合(図1)、人物の顔だけを描く場合(図2)、人物の上半身を描く場合(図3)の3つが見いだされた。人物の全身を描く者は21.4%(30名)、人物の顔を描く者は7.8%(11名)、人物の上半身を描く者は19.1%(27名)であり、記念写真型で描いた者を合わせると48.2%(68名)であった。栗山(1995)は、この型を示す者が63.3%いることを見いだしている。この型は、家族画で描かれる最も一般的な形式であり、類型化の中で最も多くみられるものである。

SCTの平均評点は、人物の全身を描いた型では3.5、人物の上半身を描いた型では3.2、人物の顔を描いた型では3.4であった。いずれの型も標準評点の3より高い。このことから、記念写真型の家族関係は良好であることが考えられる。SCTの「家の人は」の刺激語に対して、「家の人はみんな明るい。みんなまとまりがある」「楽しいいっしょにいて安心する」といった良好な家族関係を示す反応文が多く見られた。

②自分省略型

家族画に自分だけを描かない自分省略型の家族画を描いた者が10.6%(15名)見られた(図4)。栗山(1995)では、この型を示した者は10.0%であった。

SCTの平均評点は2.5で標準評点より低い。SCTの「家の人は」の刺激語に対して、「家の人はバラバラ、仲が悪いので食事と一緒にしないし、余り話もしない」「いつもみんな忙しく、一緒に食事をとることは少ないです」といった家族関係に問題のある反応文が多く見られた。大原(1988)は、家族画の読みとして、自分自身を省略する場合、必ずしも省略した本人が家族から排除されていることを意味しないが、何らかの理由で家庭にうまく適応していないために、自分自身の像を省略する傾向があると述べている。自分を省略している家族画を描く者は、自分と家族の一体化がなされていないことを示すものと考えられる。

③枠型

家族のメンバーを枠で囲んで描いたものである(図5)。枠型の家族画を描いた者は6.3%(9名)見られた。栗山(1995)では、この型を示した者は8.0%であった。枠型については、高橋(1987)はなんら述べていないが、栗山(1995)や本研究において見られたことから、この型も家族画の類型化の一つとして考えられる。

SCTの平均評点は2.5で標準評点の3よりも低い。SCTの「家の人は」の刺激語に対して、「それぞれ自分の世界にいる」「こんなに気の合わない家族があっていいのか。生活上のパートナーである。私は浮いているような気がする」といった家族のまとまりのなさを示す反応文が多く見られた。

栗山（1995）においても、この型を示す者の感想文は家族のまとまりのなさを述べており、本研究の結果と一致する。

④家系図型

家族を家系図のように描いたものである（図6）。家系図型を描いた者は5.6%（8名）であった。栗山（1995）では、この型を示した者は3.3%見られた。

SCTの平均評点は3.3で標準評点より高い。SCTの「家の人は」の刺激語に対して、「みんながみんなのことを思っています。いざというときには団結できるでしょう」「暖かいひとばかりです」といった反応文が見られた。栗山（1995）の家系図を描いた者の感想文でも同じような良好な家族関係を示す感想が見られており、問題は見られなかった。大原（1988）は、家系図のパターンを描く者は循環気質のそううつ気質の者が多いと述べている。このことについては、今後さらに検討すべき点であると思われる。

⑤漫画型

家族の人物を動物や漫画風の形態で描いたものである（図7）。この型を描いた者は4.2%（6名）であった。栗山（1995）では、この型を示した者は2.8%であった。

SCTの平均評点は2.0で標準評点よりかなり低い。SCTの「家の人は」の刺激語に対しては「みんな明るい」「みんなおもしろい」と述べているが、「私の父」の刺激語に対しては「きらい」「怖い」、私の母」の刺激語に対しては「かわいそう」、私の兄弟」の刺激語に対しては「うるさい」といった反応が見られた。このように家族の親和感の欠如が見られ、現実の家族関係に問題があることを示しているようである。

⑥未来型

現在の家族ではなく未来の家族を描いたものである（図8）。未来型を描いた者は2.1%（3名）であった。栗山（1995）では、この型を示した者は2.0%であった。

SCTの平均評点は3.0で標準評点と同じである。SCTの「家の人は」の刺激語に対して、「みんな仲間。常に会話がとびかっている」「みんなに笑いがある」といった反応文が見られた。栗山（1995）の未来型を描いた者の感想文にも問題は見られなかった。しかし、大原（1988）は、未来の家族を描くものには、現在の家族に何らかの問題をもつことが考えられ、空想した家族を描くという高度な防衛を用いると述べている。このことからすると、未来型を示す者は家族関係の対人関係に問題をもっていることが考えられる。未来型については、さらに今後の検討が必要であると思われる。

⑦顔面空白型

家族成員の顔が空白のままの家族画である（図9）。顔面空白型を描いた者は2.1%（3名）であった。栗山（1995）では、この型を示した者は4.7%であった。

SCTの平均評点は2.3で標準評点よりも低い。SCTの「家の人は」の刺激語に対して、「いろいろちょっかいをだしてくる」「うるさい」といった反応文が見られた。非行少年の描く家族画には空白の顔を描く者が多いことが見られている（高橋，1987）。これについて、高橋（1987）は自我同一生が確立されていなかったり、性的同一生の混乱を示すものであると述べている。顔面空白型を示す者には、なんらかの意味で家族内の対人関係に問題をもっていることが考えられる。

⑧家・人型

家を中心に描き、家の側に家族を描いたものである(図10)。この型を描いた者は3.5% (5名)であった。家・人型は、栗山(1995)や高橋(1987)においては見られなかった型で、本研究で初めて見られた型である。

SCTの平均評点は2.6で標準評点より低い。SCTの「家の人は」の刺激語に対しては、「家族そろって食事することはない。同じ屋根の下に住んでいるとさみしい気がする」「みんなそれぞれで、いっしょにごはんを食べることはありません」「一人一人が自由に生活している感じですよ」と述べている。これらから、家族関係のまとまりのなさがうかがえる。家の中で家族が過ごす時間がないことを、「家」と「人」が別々に描かれている絵画に投影したことが考えられる。家・人型については、さらに今後の検討が必要である。

⑨家型

家だけを描いており、人物は描かれていない型である(図11)。この型を描いた者は2.1% (3名)であった。この型も、本研究で初めて見られた型である。

SCTの平均評点は3.0で標準評点と同じである。SCTの「家の人は」の刺激語に対しては、「私を信用している」「落ち着いていろいろ考えている」と述べており、これからは問題点は見られていない。しかし、漫画型や家・人型では、家族関係に問題が見られたことからすると、人物の描かれていない家型も、家族関係に問題の生じていることが考えられる。この型についても、今後の検討が必要である。

⑩図形型

人物を円形の図形で描いた型である(図12)。この型を描いた者は0.7% (1名)であった。この型も、本研究で初めて見られた型である。

SCTの平均評点は1.0で標準評点よりかなり低い。SCTの「家の人は」の刺激語に対しては「それぞれ独立している」、私の父」の刺激語に対しては「尊敬すべき人」、私の母」の刺激語に対して「遠い存在」、家の人は私を」の刺激語に対して「私を劣っているとみている」、将来」の刺激語に対して「わからない」といった否定的な反応が多く見られた。大原(1988)においても図形型は見られており、家族に対する葛藤の存在を示していると述べている。図形型は、家族同士のつながりに何らかの問題をもっていることが考えられる。

⑪各自区分型

それぞれの人物を線で区分した型である(図13)。この型を描いた者は0.7% (1名)であった。この型も、本研究で初めて見られた型である。

SCTの平均評点は3.0で標準評点と同じである。SCTの「家の人は」の刺激語に対しては「個性が強すぎる」といった反応文が見られた。SCTの反応文から考えると、お互いの個性の強さを示すための心理機制が、図13で示されるような人物を線で区分する家族画に表現されたと考えられる。

(2) 動的家族画

絵を描いた被験者に占める動的家族画を描いた被験者の人数の割合を求めたところ、13.4% (19名)の者が動的家族画を描いた。教示では、家族の動作について描くようには言われなかったにもかかわらず、家族の動作が示されていた。動的家族画としては以下の3種類が見いだされた。①家族の団らんが描かれている団らん型(図14)が7.0% (10名)、②食事の様子が描かれている円卓型(図15)は1.4% (2名)、③それぞれの家族の成員の違った様子が描かれている分散分離型(図

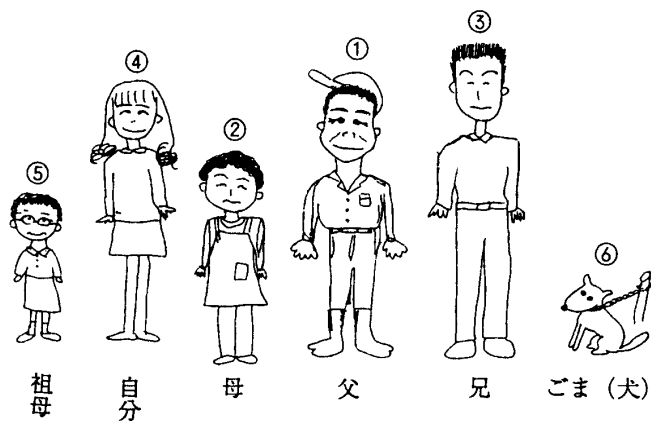


図 1

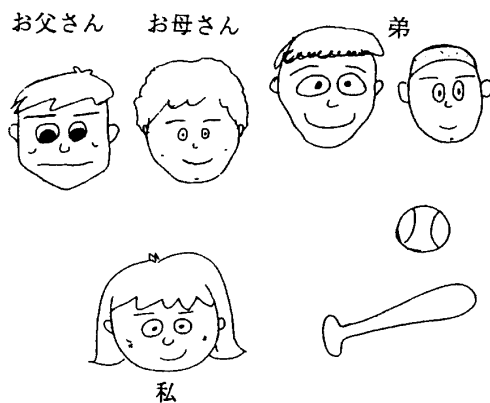


図 2

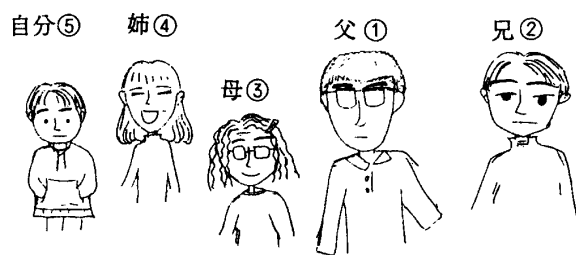


図 3

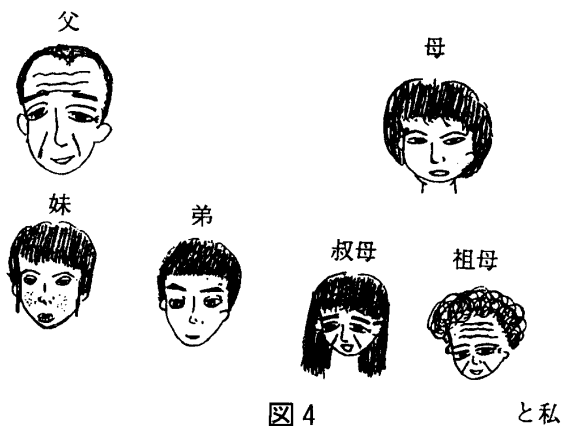


図 4

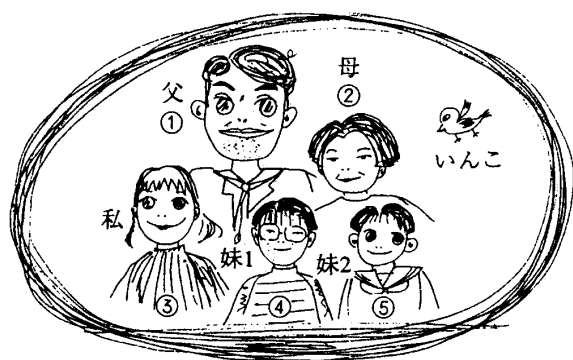


図 5

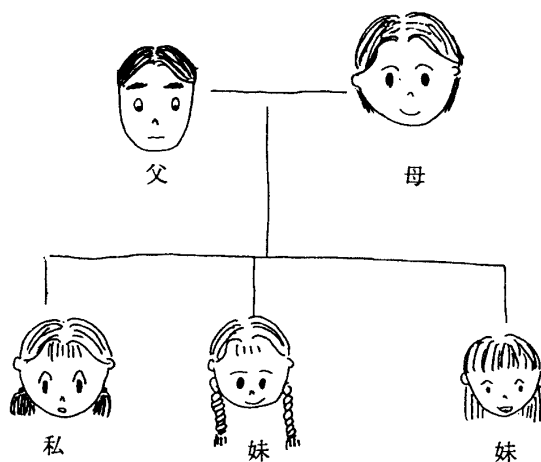


図 6

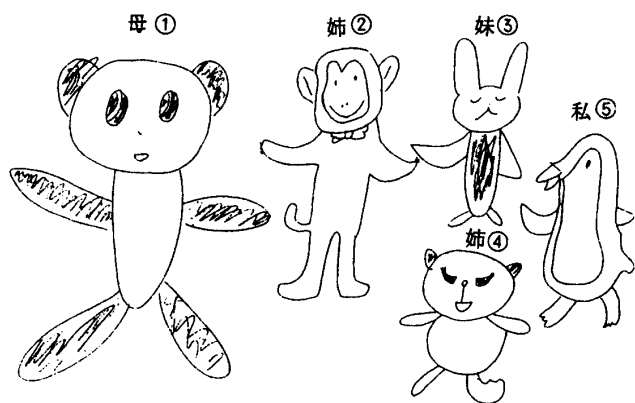


図7

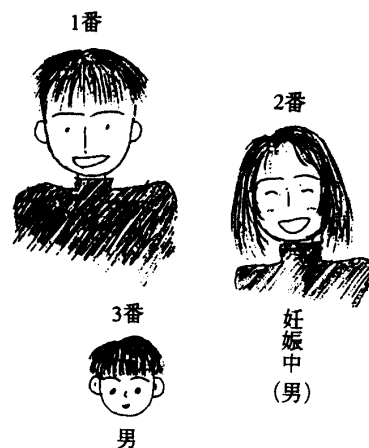


図8

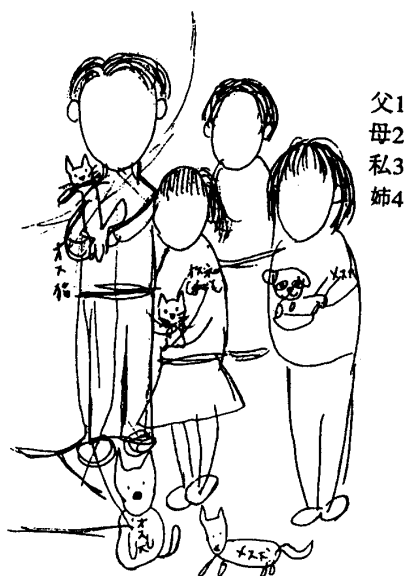


図9

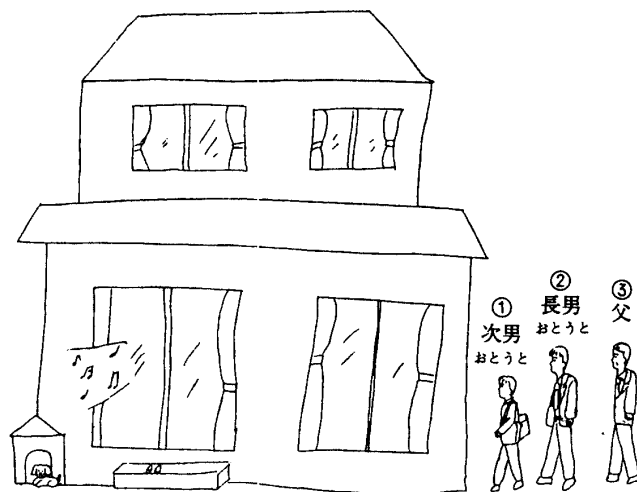


図10

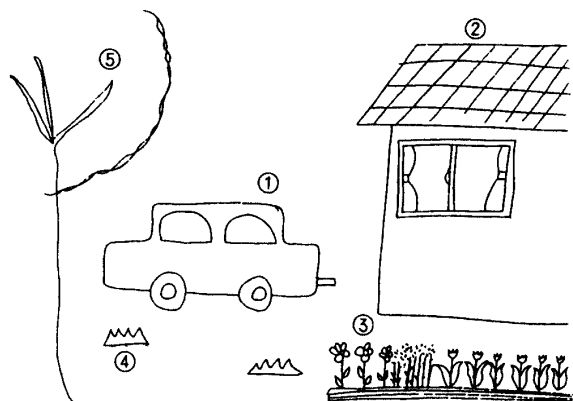


図11

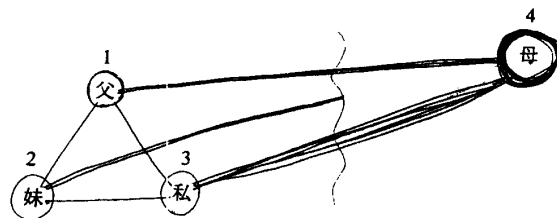


図12

私の家族

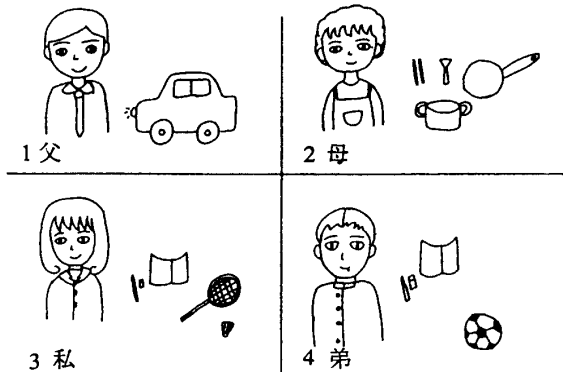


図13

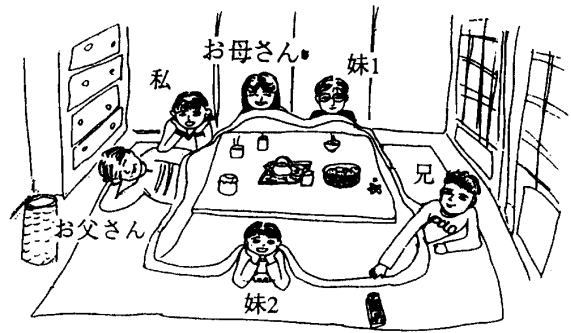


図14

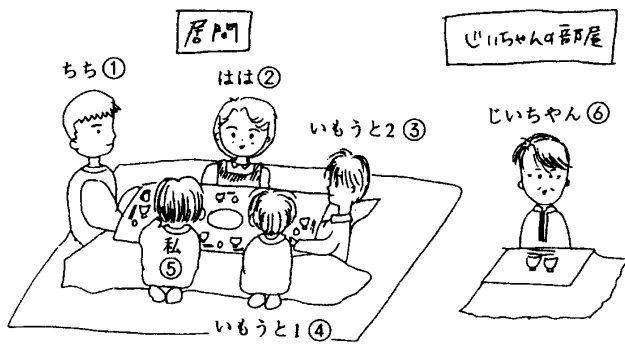


図15

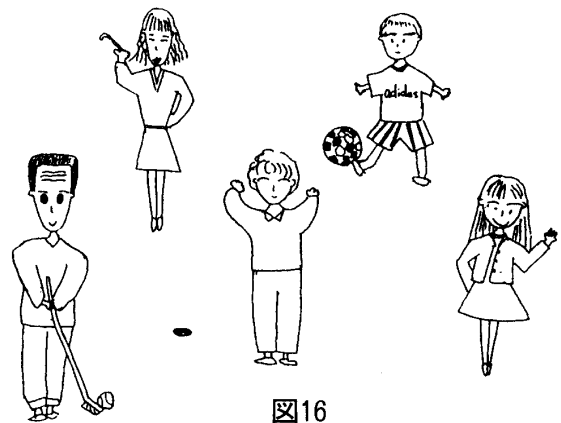


図16

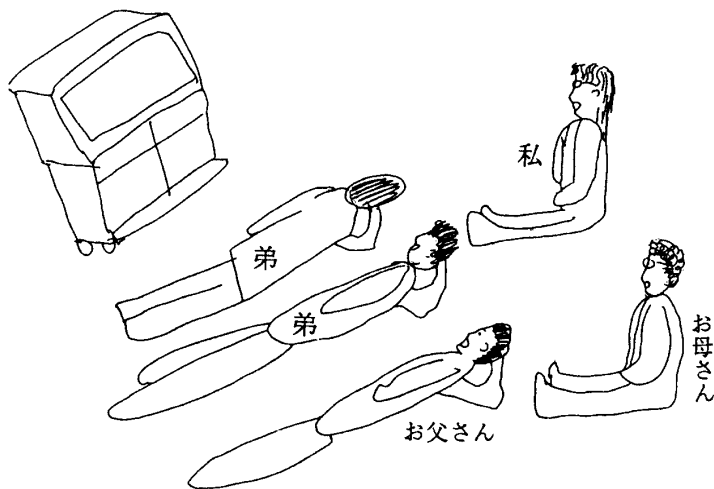


図17

16) が4.9% (7名) 見られた。栗山 (1995) では、団らん型が2.6%, 円卓型は2.6%, 分散分離型は4.0%であった。

SCTの平均評点は、団らん型が3.5, 円卓型が4.5, 分散分離型が2.9であった。分散分離型は標準評点よりも低い。他の2つの型は標準評点よりも高い。団らん型のSCTの「家の人は」の刺激語に対しては「みんなおもしろくやさしい人たちです。」、円卓型では「みんな元気で、けんかはするが、まあまあ仲はよい、将来結婚したら、こういう家庭にしたい。」、分散分離型で

は「みんな協力していきるべきです」といった反応文が見られた。これらの SCT の平均評点や反応文からみると、円卓型の家族関係がもっともまとまりがあり、分散分離型では家族のまとまりの悪いことが考えられる。栗山（1995）においても、分散分離型は家族の疎通のなさがみられていたが、これは本研究の分散分離型において見いだされたことと一致している。同じ動的家族画でも描かれている内容によって、家族関係に違いがあるといえよう。

高橋（1987）は、動的家族画は非行少年では58.2%とかなり高い割合で出現すると報告している。しかし、本研究から考えると、動的家族画の中でも、分散分離型には家族関係の問題は見られるが、円卓型や団らん型には家族関係の問題はほとんど見られない。このことから、動的家族画に問題があるのではなく、描かれている内容を考慮する必要がある。

（3）家族画の読みとして描く順序と顔の向きについて

大原（1988）の家族画の読みに基づいて、描く順序と顔の向きについて検討した。大原（1988）によれば、家族成員の最も重要な人物を最初に描くという。本研究では、最初に描く人物の比率は、父親（76.5%）、母親（9.2%）、本人（7.8%）、兄弟（4.9%）であった。栗山（1995）では、最初に描く人物の比率は、父親（70.1%）、母親（14.6%）、本人（5.3%）、兄弟（10.0%）であった。女子短期大学生の最初に描く人物は父親であり、これは家族の中に占める父親の地位の重要性を示すものである。

人物の顔の向きは、ほとんどの家族画で正面を向いていたが、中には横向きや後ろ向きのもも見られた（図15）。横向きの顔が見られた家族画は7.8%（11名）であり、動的家族画にのみ見られた。これは、テレビを見ている状態や、食事をしているときの誰かが向こうを向いている状態によっても考えられる。しかし、そのような状態でも多くの場合は向こう向きに描かないことから、顔面空白型と同じ様な意味をもつ可能性が考えられる。横向きの人物になんらかの問題を有し、描画することを回避していると考えられる。特に、図17のように全員の顔が横を向いている家族画では、SCTの「家の人は」の刺激語に対して「みんながそれぞれです。まとまって行動することはありません」という反応文が見られた。これは家族関係の意思疎通に問題を示しているものと考えられる。このように、家族画で横向きの顔を示すことは、家族関係になんらかの問題をもっていると言えよう。

全体的考察

本研究は、栗山（1995）で見いだされた家族画の類型化の資料が、一定して見られる安定した様式であるかについて検討することが目的であった。本研究では、家族画の特徴に基づいて静止的家族画と動的家族画の2つに大きく分類した。栗山（1995）では、静止的家族画には8つの家族画の類型化が、動的家族画には3つの類型化が見いだされたが、本研究では、静止的家族画には11の類型化が、動的家族画には3つの類型化が見いだされた。静止的家族画では、栗山（1995）で見られた記念写真型、枠型、自分省略型、家系図型、未来型、顔面空白型、漫画型が、本研究でも同じように見られた。また、それぞれの種類の割合もほぼ同じであった。これらのことから、記念写真型、枠型、自分省略型、家系図型、未来型、顔面空白型、漫画型は、女子短期大学生に一定して見られ

る類型化の様式であることが明らかになった。しかし、家・人型、家型、図形型、各自区分型は、本研究でのみ見られた型であった。これらの型を描いた者の割合は、かなり少なく、特に図形型と各自区分型は1名ずつである。描いた割合のかなり少ない型については、今後の検討が必要である。動的家族画については、本研究でも団らん型、円卓型、分散分離型の3つの型が見られた。動的家族画にはこうした3つの型は常に一定して見られる型であると言えよう。

次に、こうした家族画の類型が有している家族関係の問題を明らかにするために、栗山（1995）は家族画の感想文の分析から、静止的家族画では、枠型、自分省略型、未来型、顔面空白型、幼児退行型、漫画型に、家族関係の問題を見いだした。本研究ではSCTの分析から、枠型、自分省略型、顔面空白型、漫画型、家・人型、家型、図形型に、家族関係の問題を見いだした。また、動的家族画では、いずれの研究でも分散分離型には家族の疎通の無さやまとまりの悪さが示された。このように2つの研究で一致して見られたことから、枠型、自分省略型、顔面空白型、漫画型、分散分離型は家族関係に問題を有することが明確になったと言えよう。

さらに、本研究では、各類型における家族関係の状況を客観的に理解するため、SCTの評定を実施した。平均評点が標準評点より低い型は、枠型、自分省略型、顔面空白型、漫画型、家・人型、家型、図形型であった。SCTの評点からも、これらの型には、家族関係になんらかの問題をもっていることが示唆される。特に、図型、漫画型、家型は評点が2以下であり、家族関係に大きな問題のあることが考えられる。こうしたSCTの評点からの家族画の検討は、本研究が初めてであり客観的資料を得るために有効な方法であると考えられる。

また、家族画の読みとしての描く順序と顔の向きについても本研究で検討した。女子短期大学生が一般的に描く人物の順序は、父親、母親、本人、兄弟の順序であった。その他に、顔の向きでは、図17のように全員が横向きの顔で描かれる絵画もみられた。こうした分析は、家族画の類型化として分析はできないが、家族画の内容分析においてはかなり重要である。大原（1988）は、家族画の特有な読みとして、位置・大きさ・分散・表情・空間象徴をあげている。家族画を理解するには、家族画の読みにも十分に考慮することが重要である。

栗山（1995）において見いだされた類型化における家族関係は安定して見られるものであることが、本研究から明らかにされたと言える。しかし、家族画は心理的变化のある一瞬の情報を語るものであり、その所見が恒久的な傾向と対応しているとはいえない。従って、面接やそのほかの心理テストを併用して、家族画の意味するところを十分に考慮しなければならないと思われる。また、本研究は、安定した資料であるかどうかを見ることを目的としたために、SCTの評点の統計的検討はおこなわなかった。統計的検討をしていないということで、本研究の類型化の分析の価値は減じるものではないと考える。しかし、SCTの評点やそのほかの統計的処理の方法を今後考慮して、家族画における表現病理性の標準化を考える必要がある。

また、今後の課題としては、本研究で見いだされた家族画の描画形式類型が、幼児や児童においても見られるかについて、検討する必要がある。

引用文献

- 入江是清 1994 家族画と表現病理 臨床精神医学, 23 (10), 1171-1181.
石川 元 1992 人物画・家族画 精神科治療学, 7, 215-228.
栗山和広 1995 女子短期大学性の家族画テストについて 宮崎女子短期大学紀要 21, 27-34.
村瀬孝雄 1976 青年期をめぐる実証的考察 笠原嘉 他(編) 青年の精神病理 1 弘文堂
大原健士朗 1988 家族関係の病理 NHK 市民大学
高橋雅春 1985 心理診断法としての描画テスト—家族画テストを中心として 関西大学社会学部紀要, 16 (1), 277-288.
高橋依子 1985 青年に試行した家族画テスト 嵯峨美術短期大学紀要, 11, 62-71.
高橋依子 1987 大学生の家族画 臨床描画研究 II, 27-42.

[1995年12月10日受理]